

私からみた構造改革（下）

——初岡昌一郎氏に聞く

キリスト教・構造改革との縁

——今のご報告に基づいていくつか質問させていただきます。一つは、津山基督教図書館高校と国際基督教大学がいずれもキリスト教なんですね。キリスト教については何も触れられませんでした。これはただの偶然で、宗教的な面で何か影響を受けられたというようなことはなかったのでしょうか。社会運動や平和運動への関心ともかかわるかもしれませんが、なぜそういう関心が初岡先生の中に芽生えたのか。その上でキリスト教などの宗教の影響はなかったのでしょうか。

二つ目は、構造改革論とかかわったのは57年から60年の4年ぐらいということになるのかという点です。

初岡 構造改革論というよりも、それは構造改革派の人たちとかかわった期間ということですね。松下圭一先生や佐藤昇さんとの出会いがきっかけになって、1956～57年ぐらいから関係がはじまり、60年前後にピークに達しました。ユーゴスラビアに留学するために、63年に日本を去って構革派の人々との直接的な関係が一旦は切れました。

キリスト教についてですが、自分をキリスト

教徒だと規定することはできません。しかし、キリスト教から非常に大きな影響を受けたことは事実です。聖書や関連する書物、キリスト教関連の思想書をかなり読みました。特に、無教会派の考え方に非常に影響を受けました。無教会派というのは神と個人の間には聖職者のような他者の介在は必要ないという考え方で、牧師だとか宗教を職業とする人たちを認めない。信徒によって財政的に支えられた恒常的な連合組織をつくるということはありません。無教会派の考えは、メノナイトとかクエーカーに共通している点もあると思います。そういうキリスト教の考え方には非常に惹かれました。

それからもう一つ、普遍的なものを見るという考え方に早くから親しみました。つまり、国やナショナリズムとか、政党など自分が属する組織や共同体を超えてものごとを見るのが基本であることを学びました。この意味で、大きな影響を受けたと思います。

——社会運動や社会問題への関心とは、直接のかかわりはなかったのでしょうか。

初岡 内村鑑三先生の著作を通じて啓発されました。内村鑑三の本を読むと、日露戦争以後、特に平和と社会的諸問題を非常に重視して取り

本稿は「社会党・総評史研究会」による第3回研究会の記録の続きである。初岡昌一郎氏の報告については、本誌No.657（2013年7月号）を参照されたい。

上げています。高校時代によくそんな機会があったなと思うのですが、矢内原忠雄（1893～1961）先生とか南原繁（1889～1974）先生など無教会派の指導的な方々が森本先生の招きで津山に來訪され、その都度我々の高校で講話がありました。そういう人々の聲咳に直接触れ、刺激を受けたと思います。無教会派とのつながりを通じて立派な人びとと個人的に触れ合う機会を得たのは幸運でした。そういう縁がなければ、矢内原忠雄先生とか隅谷三喜男先生に個人的に知遇を得て、いろいろ教えを受けることはなかっただろうと思います。これにより、非常に大きな人格的影響を受けました。

私はアドルフ・シュトゥルムタールの労働運動論を愛読しました。60年代の中頃、シュトゥルムタールの本『ワーカーズ・カウンシル』を翻訳して日本評論社から出したとき、隅谷先生との共訳にして頂きました。もともと日本評論社では隅谷先生の監訳として、僕は下訳をする予定だった。普通の先生ならそのままだったと思うけれど、隅谷先生は僕の原稿を1ページごとに点検の赤を入れ、最後に「この作業過程からいったら、初岡君との共訳にしたほうがいいと思う」と言われたのです。

日本評論社の編集者で、私を隅谷先生のとこに連れて行った森田実さんもびっくりした。当時、先生は高名で、東大経済学部長だった。無名で、組合の若い一書記が共訳者として並ぶのに、本を見たみんながびっくりした。隅谷先生でなかったら、そんなことはおそらくなかったでしょう。

そのあと隅谷先生はいろいろな公職に就かれました。日本労働協会会長にもなられた。労働協会の歴代会長はほとんど大学教授と兼職でしたが、隅谷先生は会長職を引き受けるとき、二重の報酬をもらわないという条件で引き受けた。こういう人はいない。そういう点で隅谷先

生や、無教会派の人たちには出処進退が立派な人が多かったと思う。

ICU（国際基督教大学）でも、初代の湯浅学長は無教会派に比較的近く、理解があった。一般教養学部長の篠遠義人先生が無教会派の人でした。この人は生物学者だけれど、自分で篠遠訳聖書を出している。そういう人びとの人柄は非常に印象的でした。

——そうすると国際基督教大学に行かれたのは、単に入りやすかったというだけではない。

初岡 それもあったが、選択した結果だと思っています。

——加藤宣幸さんのお話との事実関係を確認したいのですが、前回の加藤さんのお話だと、佐藤昇さんを初めて会に呼んだときには、「イズベスチヤ」の東京支局に勤めていたという。

初岡 そこを辞めていたから、『思想』の佐藤論文を書いたんだと思う。それまでは佐藤さんは実名で書いていない。佐藤さんがすでに共産党関係から離れていたのだから、今までのようにペンネームでなく、初めて実名を出して書いた論文だったと思います。

——1960年ぐらいにソ連を訪問する。9月、10月と今日のレジメには書いてありますね。この間の加藤さんのお話だと、初岡先生は1960年から61年まで世界青年学生フォーラム書記局員としてモスクワに常駐していたそうですが。

初岡 60年は準備会議だけに行きました。そのときの滞在はほんの短期間でした。その頃は定期便がなかったので、ソ連から来た貨物船を探して行くことにしました。北九州の八幡から出る船があるということで、現地に行って待機していた。ところが、9月中旬で雨が続き、予定を1週間過ぎても出航しない。ソ連から石炭を持ってきて、八幡製鉄の薄い鋼板を積む。鋼板が雨で濡れると錆びるので、荷積みができ

ません。その間にモスクワの準備会議が終わっちゃった（笑）。

こっちはカンパをもらい東京駅で派手に送り出されているので、東京に帰るわけにいかない。船の切符も買っているし、行ってしまった。モスクワに行ったら、日本は常任書記局に欠席のまま選ばれていますと告げられた。そういうことは非常に政治的です。中国と日本がアジアを代表して常任書記局に選出されていた。

帰路は、シベリア鉄道に乗せられて今度は10日間。ハバロフスクで途中下車したら、ラジオで日本社会党の委員長が殺されたと放送されていました。「誰が殺したの」と聞くと、「アメリカ帝国主義と日本独占資本の手先です」なんて話でした（笑）。すぐ船に乗って帰りたいのですが、不定期の貨物船なのでいつ出るかわからない。

ナホトカに着いて昼食をとっていたら、「あと1時間後に出る貨物船が見つかりました」「その船はどこに行くの」「日本は小さいから、どこにいても同じでしょう」（笑）。乗ってすぐ、まず船長に「この船はどこに行くんですか」と間抜けな質問をすることになった。室蘭の製鉄所に行くことがわかりました。ソ連に行っただけで、それまで行ったこともない九州と北海道にも行った（笑）。

——構造改革論についてですが、前回加藤さんは、北岡和義さんの『政治家の人間力』（明石書店、2007年）という本を紹介して、構造改革というのは思考スタイルの総称でスローガンみたいなものだから、あまり細かいことにこだわらず曖昧のままにしておいたほうがいいんだというようなお話でした。結局、構造改革がどういうものだったのかというのをはっきりとお話にならなかったのです。

それだと、これから若い人が論文を書くとき「曖昧でした」で終わってしまうので、一つの

仮説として私は次のように考えています。構造改革というのは、大衆社会の成立を受けて、日本社会党が日本経済の構造を改革することによって結果的に有権者の意識改革、労働者の意識改革を図り、それによって日本社会党の議席を増やすことも狙ったのではないかと考えているのですが、こういう解釈でよろしいでしょうか。

初岡 その解釈がだいたい妥当ではないかと思えますね。僕なりの理解では、構造改革路線は、政治的民主主義を通じて社会経済の抜本的な改革を実現することを主眼としたものでした。もちろん議会を中心とするのだが、議会内だけでなく大衆運動やさまざまな自主的な組織、地方自治体の役割を重視した。単に国会の中だけでもものが決まるというのではなく、もっと分権的運動的に改革を展開していくという理解だったと、自分なりには思っています。

それから、構造改革派という主体を強化・増殖するというのも目的だった。ただ、改革主体を強化する必要もあるけれど、それを固定的に捉えることは自己矛盾になってしまうかなという気もします。緩やかな組織的つながりとしてはありうるし、またそれがある程度あったかもしれないけれども、社会主義協会のようにセクト的な組織をつくっていくという構想はなかった。また、その必要性は考えられなかった。いろいろな議論を進める中で、大勢がそういう方向に収斂していくに違いないという楽観論にたっていましたから。

——構造改革派といった場合、どれほどの広がりがあったのでしょうか。

初岡 これはなかなか自己規定しにくいと思えますね。加藤さんたちはそのときのマスメディアを通じて党外的世論にインパクトを与えることにすごく熱心だったし、それはかなり成功した。新聞記者とのつながり、それから学者と

のつながりを通じて、加藤さんや貴島さん達が実態以上に膨らんだイメージを世間に与えた面があったかもしれない。

実態がともなわないのに構造改革派が社会党内の中心を占めているような印象が、党外に生まれていたかもしれない。一夜城のようなものがつくり上げられてしまった。

——イメージとしてかなり大きくなった。

初岡 そうそう。イメージがすごく膨張し、社会党の中の主流だというような印象を持たれた。政治的キャンペーンとしては、大きな成果を挙げたと思う。でも、それに反比例して、党内的な反発と抵抗が組織されてくると脆い面があった。

——それは中央段階の書記クラスが中心であったと。例えば地方の役員とか活動家とかいうところまでは、はっきりしていたのでしょうか、いなかったのでしょうか。

初岡 ある程度は広がっていたと思いますね。国会議員集団の中にもかなりの支持者はあったと思います。派と言っていいかどうか分からないけれども、例えば羽生三七さんなど、派閥色のない、知的良心的で常識のある議員が有力な理解者でした。党役員では横路節雄さん、椿繁雄さん、大原一二さんなどですね。地方の中でも、有力な専従者が何人かいたと思います。とくに関西が主要な拠点でした。政治地図を見ると、社会党と官公労の中の左右分布や協会対構革派の対立図式は、県単位では見事に一致していました。労働組合の中で左派の強いところは社会党の左派が強かった。労働組合といっても官公労中心でしたからね。この一致はほとんど狂いがなかった。

ソ連、社公民路線について

——2点、質問させていただきます。1点目は、60年代にたびたびソ連を訪問された。そ

のときロシア社会の欠陥を目の当たりにして、ソ連型では駄目だということを確認されたということでしたが、具体的に初岡先生がソ連に行き見て見たロシア社会の欠陥というのは、いったいどういうものであったのかというのが1点目です。

2点目は、江田三郎先生が社公民路線を打ち出したとき、それに反発して側近の人もブレインの人も離れる人が多かった。初岡先生のお話だと、公明党と組むことに違和感を覚えた人が多かったから離れていったという印象を受けたのですが、船橋成幸さんの本では当時革新自治体が社共でやっていて、公明党と組むために反共でいかなければいけない。そうすると、地方は社共でやっているのにそれでは困るということで、結局江田さんの反共路線にはついていけないといって離れた人が多かったというような書き方をされている。

社公民路線に反対が多かったのは、共産党と離れる、共産党の代わりに公明党と組むという、両方に反発が強かったのか。それとも反共ではやっていけないというところが強かったのか。公明党と組むのは嫌だというほうが強かったのか。そのへんのことをもう少し教えていただきたい。

初岡 ロシアは僕が見ても、一般の人にとって非常に不自由な社会だった。それから、一般市民は情報から隔離されていた。当時、私は身分不相応にいいホテルに泊めてもらっていたのですが、ホテルの売店で買える外国の新聞・雑誌は、他国の共産党が発行しているものしかなかった。日本のものは、最初は『赤旗』だったけれども、そのうちに『日本のこえ』だけになってしまふ(笑)。『日本のこえ』もあまり届かなくなる。これではどうにもならない。

それから、エリートとノンエリートの差が大きすぎた。例えば、僕が個人で食事に行くと、

ドアがバーンと閉められ、「もう閉店だ、席はない」となる。コムソモールの人と一緒にいくと、彼は「われらはコムソモール中央委員会だ。この人はそのゲストである」。そうすると、とたんに席がでてくるのですね。タクシー乗り場に長い列が並んでいても、彼はぱっと、水戸黄門じゃないけれども書付のようなものを出して、割り込んでタクシーを取ってくれる。

これにたいしては、日本人の政党や組合から来た訪問者の中に、受け取り方が二つあった。大半の人は「彼らはすごい権力を持っている。やっぱり権力を持つのはすごいな」と肯定しちゃう。おかしいと考える人は少なく、10人のうち1, 2人ぐらい。当時は代表団で来て、「ソ連はすばらしい。やっぱり権力を取ると効果は絶大」と見る人が多かった。

あともう一つ、当時のソ連では大学を出ても職業選択の自由がほとんどなかった。いったんある職業に就くと、党员であるとか、あるいは上に何かコネがないと、そこから上昇してゆくことはできない。職業選択の自由があれば、ほかの自由はあとからついてくる。今の中国では職業の選択の自由があるので、当時のロシアと混同したような一党支配を同一的な独裁だとして批判する議論は、ちょっと見当が違うのではないかなと思う。

J.S.ミルも言っていますが、人間の自由は経済的自立の基礎が確立しないと生まれない。経済的な自立は、職業選択の自由がないとできない。職業の選択が上から全部支配されたら、それは非常に変な社会です。スターリン主義のソ連はそういう社会だったと思います。ゴルバチョフになったときも、その点はまだ灰色だったと思います。誰が人の職業配置をどのように決めるのが分かりにくい。こういうことが大きな不満の原因だと思いました。

チトーの時代のユーゴスラビアでは、もっと

競争主義的に自分の選択で決められていた。初期のことは知りませんが、私がいたころにはもう自由に職業転換できた。

それから二点目ですが、僕はそのときに船橋さんと同じところになかったので、社共共闘論がそれほど影響を与えたとは受け止めていません。しかし、社公民協力には異論が強くありました。当時構造改革論で江田さんに協力していた人たち、竹中一雄先生、山本満先生たちを含めて、社公民路線には反対だった。学者の中では、公明党というよりも、創価学会の体質が嫌いで、たぶん民社党もあまり好きじゃないという人がかなりあった。でも反共というか、日本共産党を嫌う点ではだいたい一致していたように思う。

ただ、社会党の活動家の中には、地方自治体選挙での社共協力によって、とくに飛鳥田一雄（1915～1990）さんの横浜市も含めて、革新自治体が多く生まれてきていたから、船橋さんが見ている側面も確かにあったと思う。

佐藤昇さんなど少数の人を除いて、江田さんから多くの学者が離れた決定的な理由の一つは社公民路線だったと僕は見えていた。僕は当時組合運動の中にいたから、むしろ社公民のほうがいいと思っていた。

全学連とのかかわり

——全学連主流派との付き合いについてですが、当時の運動体というか三多摩社研連の結成から関東社研連再建等々の中で、先ほど栗原登一（太田竜）や黒田寛一もいろいろなところで参加していたというようなお話だったと思います。のちにトロツキスト連盟とかいわゆる第1次共産主義者同盟とか、そういうものを理論的に形づくっていく理論家たち、のちの新左翼系の組織につながっていくような栗原とか黒田なんかと主流派との関係は、当時からよかったと

うか、そういうつながりはあったのでしょうか。

初岡 僕が個人的に知っていた当時のトロツキストは栗原登一さんと山西英一さんですね。黒田さんの著作を一、二読んだけれども非常に異質だったから、個人的にはぜんぜん接触したことはない。後のブント以降の新左翼には栗原さんや山西さんはほとんど影響がなくて、むしろ黒田さんとかそういう人たちのほうが影響を与えたと思います。でも、この点はあまりよく承知していません。

山西さんは吉祥寺に住んでいたのも、非常に早い時期、大学1年生ぐらいのときから出入りしていた。彼は当時ノーマン・メイラーの翻訳者として知られ、新潮社からたくさん本を出していた。彼は戦前のドイツに留学したのですが、向坂逸郎（1897～1985）さんと同じ時代だと思う。しかし、ドイツの政治とファシズム、それから共産主義に対する見方は向坂さんとは全く違っていた。

山西さんは非常に名作家でした。トロツキーの本も同時期に出していてね。僕はトロツキーの本を読んで、山西ってどんな人かなと思い、また自宅を訪問してしまうのです。山西さんとか佐藤昇さんなど、当時のそういう人たちは、学生が来ると一宿一飯でした。宿泊はもちろんなのですが、晩飯を出してくださる。今で言えば本当にささやかなものかも知れませんが、当時の貧乏学生には身に染みるもてなしでした。これが昔の左翼の伝統だと思った。

山西さんは、どちらかという社会党にシンパシーを持っていた。ソ連共産党第20回大会のフルシチョフによるスターリン批判が出るとすぐに電話がかかってきて呼び出され、その意義を歴史的観点から教えられました。それまでも、スターリンによる反対派にたいする苛烈な粛清についてはよく聞かされていました。

組織的につながりがあったのは栗原登一さんです。栗原さんは当時社会党青年部の活動家だった。もう1人は、のちに新潟大学で人口論の専門家になった湯浅赳男さん。この人たちは非常に真面目で、陰謀家などとはおよそほど遠い、どちらかというロマンチックな人だった。ただ、理論を詰めていくと、われわれとぜんぜん違うなどは思っていました。少なくとも人当たりのいい、暴力的な匂いのまったくない人たちでした。

——主流派の香山健一氏や森田実氏は、特にそういう人たちに影響を受けたというわけではないですね。

初岡 香山さんや森田さんも非常に優れた政治的なセンスの持ち主ですが、当時からそれほど理論的な人ではなかった。生田浩二や青木昌彦が全学連理論派として知られていました。島成郎さんを僕は理論的な指導者かと思っていたが、あとで知ると島さんもむしろ人間力で引っ張っていた人でしたね。島成郎、香山、森田などの当時の全学連幹部は魅力的な人たちで、人間的には好感を持っていました。いろいろと『赤旗』で叩かれたような、無頼漢的な印象はぜんぜんなかった。

香山さんはとくに死ぬまで付き合い、彼が死んでから遺言で蔵書を中国社会科学院に寄付するというので、奥さんや学習院の先生方と一緒に訪ねました。香山さんは中曽根さんのブレーンになったというので叩かれたけれども、本来、彼は大平さんのブレーンだった。大平逝去後、彼らのグループを藤波孝生（1932～2007）さんが全部中曽根さんのところにくっつけちゃった。これは藤波さんの人柄によるものだと思います。

彼がいちばん大きな役割を果たしたのは、中曽根総理に靖国参拝をやめさせたことです。やめさせただけでなく、同時に積極的友好政策を

とるように進言して、日中21世紀委員会というのをつくり、自らその中心的なメンバーとなった。そのときに、香山－胡啓立の信頼関係が開開工作のカギとなった。僕も個人的によく知っているのですが、香山氏が全学連委員長るとき、中国学連委員長が胡啓立でした。文革で地方に追放された彼がちょうど復活して共青团第一書記となったころでした。胡耀邦の右腕の役割を担っていた彼が橋渡ししたことは事実です。

香山さんは非常に政治的な先見性があり、また割り切りのいい人でした。例えば、これはぜんぜん知られていないけれども、臨教審委員のときに彼は日教組の肩を半分ぐらい持つような香山メモを出している。文部省と事務局から、「やっぱりこいつは全学連だ」と響感を買ったそうですが。彼は自立した人だから、別に中曽根さんに従属していたわけではなかった。清水幾太郎さんが学習院を辞めるとき、自分の後任として香山さんを引っ張ったので彼は学習院教授に早くからなっていた。

香山さんは機を見るに敏な人で、相手がどういうことを期待しているかというようなことを洞察するのは実にうまい人でしたが、御用学者的な匂いはしなかった。彼は中国からの引揚者で、安全保障の考え方はハト派だった。決してタカ派ではなかったのだけれど、誤解されていた。ただ、教育問題では自由化論者だった。彼は半分以上、臨教審路線を支持していたが、教育の自由化や組合の存在容認と教師の自立尊重の面では文部省と異なる主張でした。

社青同内の構造改革派

——社会党青年部がある状況の下で社会主義青年同盟を新しくつくろう、社会主義青年同盟をつくるにあたって社会党青年部は廃止しよう。社会党青年部から社会主義青年同盟へ

の編成替えを構造改革の考え方で突っ込んでいこうというお話がありました。なぜ、社会党青年部の強化ではなく社会主義青年同盟への全面的な編成替えを、しかも構造改革路線の下につくろうと思われたのかというのが1点です。

もう1点は、『月刊社会党』の、これは64年4月号ですが、今ちょうどお話しされたところで、「社青同大会を顧みて」という立山学さんと高見圭司さんの記事が出ているところです。

初岡 はい。彼らは批判派の論客でしたから当然立場が違いました。

——私は世上でよく流布されているような構造改革派が右で協会派が左にあったという意見には与しえない考え方をしています。協会派というのは、割り切って言えば、古典には忠実かもしれないけれども創造性という点ではむしろ保守的であったと思っています。

初岡 そう。僕もそう思います。

——協会派が左で構改派が右という単純なものではない。第4回大会までは少なくとも社青同は構造改革派が主導してきた。4回大会で変わっていると思うので、4回大会以後の社青同との違い、そこをお話しただけならありがたいと思います。

初岡 いいところを聞いてくださってありがとうございます。そのところを抜かして話してしまったのですが、社会党青年部時代には二つの流れがあったと思います。一つは協会派、他は協会派でない人たちです。その人たちは概して協会より左に位置して、政治的には平和同志会とか佐々木派の一部だったと思います。あるいは全然派閥やグループに関係がない人ですね。

もう一つ反協会というか協会になじまない人たちは、全通とか国労などの組合青年部で大衆的な基盤から選挙で出てきた人たちでした。主要な組合青年部役員は、ほとんど協会派ではな

かった。当時の労働組合青年部では、社共の角逐がまだ根深くあった。

僕が親しくしていたのは、労働組合青年部活動家と非協会左派に位置していた人々です。ご指摘のように、協会派は学習中心主義で、安保闘争とか砂川闘争とかの行動にはあまり参加しなかった。だから、われわれは「思想は穏健だけれども、行動はラジカルだ」とよく言われた。

社会党青年部の場合、何と言っても社会党の政策と行動を批判することが主要な役割の一つでした。社会党の政策が気になるので、社会党に対していろいろ申し入れるとか、反幹部闘争を組織するなど、党内組織としての行動が非常に多かった。このスタイルだと、青年大衆の中では伸びてゆかない。

構造改革路線をとるわれわれは、ネーミングが今から思うとちょっとまずかったかなと思うけれども、運動的には「大衆化路線」を採ろうとした。それでは活動家を否定するのかという議論に転化されて、活動家路線か大衆化路線かというような議論にすりかえられてしまった。

当時の構造改革グループは、社青同の方針に構造改革路線を盛り込むというよりは、大衆的な青年運動をやろう、活動家の限られた集団から大衆的組織にさせようと努力しました。それがいちばんの論争の中心。最初は協会も異議を唱えていなかったけれど、社会党内論争の余波もあって、とにかく今いる執行部を追放しようということで路線批判が始まったと思います。

当時の社会党青年部の時代に圧倒的な影響力、指導力を発揮していたのは、仲井富さんの兄貴分である西風勲さんですね。特に私は、西風さんにずいぶん引き上げてもらった。西風さんの指名がなければ、経験とキャリアの浅い私が若くしてソ連に行くこともなかったでしょう。そのような面からすれば、私は社青同の一

員ではあったが、同時に旧社会党青年部の一員だったと思います。社青同が結成された時の初代委員長は西風さんだったが、その後まもなく西風さんは社会党専従中執に選出され、書記長だった西浦賀雄君に委員長をバトンタッチするのです。

西浦君や書記長になった高見圭司君をはじめ、当時社青同本部の専従者は6～7人いたのですが、私が本当に構造改革派の同志だと思った人はあまりいなかったですね。社会主義協会派も少なかったが、社会主義協会でない人が構造改革派かという、そうでもなかった。当時私がいちばん若かったから、主張を先鋭に展開し、余計に目立ったのでしょう。ほかの人からみれば、もうちょっと主張を抑えてくれないかな、われわれが迷惑しちゃうというような雰囲気があったかもしれません。僕が言うことが内部対立を煽ってしまうので、いい加減にしてくれよという空気はあったと思います。

意識して組織内に構革論争を持ち込むという形でやったわけではないけれども、私の主張は構革路線そのものと捉えられがちでした。例えば、平和友好祭運動に僕らは積極的に取り組んできました。仮に民青が始めたものであろうが、共産党が指示しているように、それが青年運動の中で広がっていく要因があるなら、我々の運動に組み入れるべきだという理由から、そのときは民青とも協調しました。協会や新左翼のほう共産党アレルギーは強かった。原水禁運動や平和運動でも、積極的に新しい展開を図りました。職場闘争一辺倒の立場の人たちはこれにも批判的でした。

当時の労働組合青年部活動から見ると、社会党青年部的な幅が狭い政治路線では広く受け入れられなかった。社会党青年部の場合、かなりの人、特に有力なメンバーは国会ないしは地方議員の潜在的候補者なんですね。私は議員にな

ろうという気もないし、社会党の専従になろうという気もなかったから、社会党から離れるという意味ではないけれども、党外に新組織をつくったほうが良いと考えました。

安保闘争後は、街頭主義的活動だけでは新組織は発展しないし、街頭主義では組合青年部とうまく協力できないと痛感していました。そこで、もう少し違う形の運動をもっと継続的にする道を模索しました。平和友好祭のように毎年継続できるような運動をやって、仲間づくりをしようとか、サークルを重視するとか、そういうことでふくらみのある運動を考えていました。それも構造改革路線議論と一緒にたくなって批判を浴びました。

——では必ずしも構造改革派を結集するために、新しく社会主義青年同盟というものをつくるということではなかった。

初岡 それは、考えなくはなかった。できれば構造改革的な方針を新組織の中で生かしたいとは思っていた。構造改革派の組織をつくろうという夢はありました。

社青同の結成をめぐる

——社青同をつくろうというのは、1940年代後半にもそういう構想はありましたし、この時期も一度つくろうとして反対されたとおっしゃられた。やはり社青同ということになると独立性が高まり、ただでさえ左派的というか戦闘的な青年部が独立すれば社会党の本部からの統制が効かなくなって手に負えなくなるという警戒感があったのではないのでしょうか。

初岡 それはあったと思う。当初、協会派はその点について社青同結成自体に反対した。

——にもかかわらず、つくったわけですね。そういう同盟という形で組織的に独立した最大の理由というか背景は何なのでしょう。例えば、民青が50年代終わりから60年代にかけて

拡大してきますね。それへの対抗というようなことは意識されていたのでしょうか。

初岡 いくつかの契機はあったと思いますが、ご指摘のことももっと大衆的な組織を社会党の側でつくるべきだという意見の中に入っていたような気がします。社会党青年部という形態では青年運動は担えない。当時安保の中で青年学生共闘会議というのをつくって、そこには社会党青年部としても入っていました。それには全学連、日農青年部、総評青婦協、民青も入っていた。こうなると、社会党青年部は大衆的基盤があまりないことがネックとなった。やはり大衆的な基盤のある組織をつくらないと、労働組合青年部、青年労働者は結集できないという結論に達した。これまでのような党内闘争がかなりのウエイトを持つ、そういう組織では限界だという、認識があったと思う。

1940年代後半の事情についてはよく知りません。山口健二さんなどが関わっていたのではないのでしょうか。山口さんははるかに年長者でしたが、個人的に一時期親しい関係にありました。

——結成直前までいくのですが、やはりやめるわけです。

初岡 そのときの事情はかなり違ったと思う。山口さんは本当にミステリアスな人で、非常に魅力的な人でした。あのぐらい最後までミステリアスな人はなかった。山口健二さんについてはあまり知られていないのですが、東大の戦後初期の学生運動から出てくるのです。社会党青年部にはないタイプの活動家で、頭もきれる人だった。彼は本質的に権威と権力を否定する、本来の意味でのアナキストではなかったかと思っています。

本部の青年部事務局長だった人ですが、私が知った当時、既に伝説の人でした。社会党が野溝勝書記長当時、青年部は野溝ユーゲントと言

われたそうです。ところが一夜にして変わっちゃうんですね。山口さんとか森田さんとか、ああいう優れた人は一夜にして変わる。人間は誰しも一夜にして変わる要素を常に持っているとは思いますがね。

話が前後するけれども、清水慎三さんが、左派社会党機関紙の後身としての『社会タイムス』編集長をやっているとき、しばらくの間、私はそこで編集記者のアルバイトをしていた。そのときは山口健二さんが中心となって『週刊タイムス』の記事を書いていた。本当に仕事のできる人でした。

その前後の彼についてはいろいろな風評があるけれども、突き止められない。何年か日本から姿を消していたようで、ブタペストの世界民青連本部に常駐していたという説もある。これは本当かどうか分からないけれども、中国で中国共産党に監禁され牢屋にも少しの間入れられたというような話もあった。でも、彼に聞くと一笑に付されただけで、答えはなかった。山口さんは本当にミステリアスな人で、ベ平連にも関係しており、アメリカ兵を日本からソ連に逃がす地下活動を指揮していたという話を新聞記者から聞いたこともある。

彼が社青同を当時どういう形で作ろうとしたかは知りません。彼や当時の社会党左派青年部の中の人たちが、私も知っている人たち何人かを含めて、社青同という組織を作ろうとしたことは事実のようです。しかし、それが実現できないまま終わったと聞いています。たぶん、大衆的な組織を作ろうとする構想ではなかったと思います。もっと先鋭な活動家集団を結集する構想だったと推察しています。

——どうも左派の活動家集団として手に負えなくなるということで、かなり本部のほうから押さえがかったような感じでしたね。

初岡 ええ。だからそういうことを覚えてい

る人には、60年代に新社青同をつくるとき、また二の舞になるのではないかと心配があったようです。

——ただこのころは60年安保ですから、そういう青年・学生層も運動へのエネルギーといえますか、民青も拡大して、いろいろな運動組織も発展していく。それに機動的に対応する必要性が出てきたというようなことだったのでしょうか。

初岡 僕らは必ずしもそういうふうに捉えていなかったのですが、そう捉えた人もあったと思いますね。共産党は意識しないことはなかったけれども原理が別の政治組織なのだから、われわれは独自で自律的な組織をつくったほうが良いと信じていました。

——ではそういうものとはまた別個に、先ほど言われたような大衆運動、あるいは大衆路線を具体化するための組織主体として、少し相対的に独立した団体をつくろうということだったわけですね。

初岡 ええ。とくに僕は労働組合の青年部と連携してつくろうと考えていました。とくに官公労ですけれども。そういう意欲を持っていたので、官公労の青年部大会とか中央委員会などにしばしば行っていました。

結果的に見て、当時の社青同にコミットして後に組合中央幹部になった人は限られた数ですけれども、そういう人たちは組合幹部として広い政治的な視野を持っていましたね。そういう面では、青年運動は純粋に企業内組合から出てきた人とは違う経験を身に着けた人材を生むうえでプラスの面があるのではないかと、今でも一般論として思う。企業を超えた交流によって生まれた連帯と仲間意識があった。

——その後、社青同の運動あるいは活動家として成長して議員になったり社会党中枢の幹部になったりという方はたくさんおられるのです

か。

初岡 横路孝弘さんとか江田五月さんとか。必ずしも社青同出身者として国会議員になったとはいえませんが。幹部ではなかったけれども、彼らも学生当時は社青同の活動家でした。深田肇さんなど、社青同委員長をした後に参議院議員になった人はありますね。これは好例とは言えないけれど（笑）。

——社会党青年部時代に比較すると、国会議員育成機関として社青同はあまり寄与しなかったということでしょうか。

初岡 そう思いますね。議会主義とか議会制民主主義重視だと言っているわりには、あまり選挙は熱心でなかったし（笑）。組合の中では、社青同から地方の幹部にずいぶん多数輩出したし、中央の幹部になって組合トップになった人もかなりあります。覚えている限りの例では、社青同大阪の初代委員長で、自治労本部書記長になった兼田和己さんをはじめとして都市交委員長長の矢富泰正さん、全国一般労組委員長長の松井康彦さん、全電通委員長長の梶本幸治さん、全通副委員長で在任中に倒れた新井則久さんなどです。

山川均、清水慎三、全通など

——大阪大学の米原謙先生が、山川理論と構革理論がよく似ていると指摘されています。当時の構革派と言われている人たちには、山川均という方は意識の中にあっただけでしょうか。

初岡 山川さんも岡山県人です。仲井富さんなんかは自分の息子に山川均の均という名前をつけるぐらい入れ込んでいた（笑）。僕もよく読んだし、途中から解放派に行ってしまった佐々木啓明君も、最初は山川、山川だったんです。社会主義協会の創設者でもあった山川さんは政治経済的分析と運動論に非常に鋭いものがありながら、柔軟な発想を持った人でした。向

坂さんのように教条的にものを発想する人とはちょっと違います。

山川さんの著作選集は買ってあるけれども、あらためて体系的には読んだことがない。山川さんが『世界』とか『中央公論』とかに発表された時評的論文はよく読んだ。山川さんのあのスタイルというか、ああいう視点をいちばんよく引き継いでいる人は、清水慎三さんではないかという気がします。清水さんと山川さんは現実と運動に即して論理を展開しようという姿勢の人で、論理から運動を構想する観点で論ずる人ではない。清水さんの構造改革論に対する批判も、そもそも構造改革論がいいか悪いかというところからは出発していない。構造改革論はこういう弱さがあるとか、考慮されていない側面があるという点から論評されています。

——だからご本人とどう違うか、よく分からないですね。

初岡 そうそう。でも、清水さんはあまり構造改革論が好きではなかった。発生の経緯からしてもね。青年部は自分の影響下にあると先生は思っていたのに、いつのまにか造反者が出て、構革派みたいなのができてしまったということ、不快感を持っておられたと思います。

——それはいちおう人脈的な。

初岡 さっきの話で一夜にして変わるということけれども、10年とか20年のスパンで見るとみんな座標軸が移動していることがよくわかります。政治的理論的な立場は一夜にして変わるか、もっと長くかかるかの違いはあります。変わらないのは20歳ぐらい迄に形成された人間性だけだなんて、よく冗談半分で言っております（笑）。

これは僕がよく言っていたので、「お得意のセリフ」とみんなに冷やかされたのだけれども、会議を設定するときに組合委員長や書記長に「政策は一夜にして変えてもいいけれど、会議

の日程だけは変えないでくれ」と要望していました。事務方にとっては、その方の実害が大きい（笑）。方針というのは、よく見ると個人にしても組織にしてもしばしば転換しています。それなりの必要があったからです。組織が大きいと個人と違って一夜にして転換できないから、徐々にカーブを切っていくのですが。

私は1964年に全通に入って、初めて給料といえるものをもらった。まともな給料を僕に払ってくれたのは全通がいちばん最初。しかし、給料袋を見たら雑誌『社会主義』と「社会主義協会費」が天引きになっている。控除項目としてちゃんと給与明細に印刷されている。そこで総務部長に、「僕はその雑誌をとってもないし、協会員でもない。こんなのはおかしい」と申し入れました。「そうだろう。俺もそう思う。でも君が言ったからといってやめたら問題になるから、しばらく任せておいてくれ。そのうちに一括してみんなのも削ってやるから」。それから半年ほどたったら、みんな消えていた。消えても誰も文句を言う人はいない（笑）。そういうふうには、過去の方針や慣行が時と共に形骸化してしまっていることは少なくない。

僕が入ったとき、既に全通は社会主義協会から離れているとみられていました。当時の委員長だった宝樹文彦（1920～）さんには、それまで会ったこともなかった。新井君に対して「お前、初岡というのを今度入れると言っているけれども、協会員じゃないだろうな」と宝樹さんが聞いたそうです。「違います」「ああ、それならいいや」と、その程度で入った（笑）。幹部の多数は脱協会化しているけれど、毎月協会費を払うことは社会主義協会結成当時から惰性になってしまっているのが疑問を表明して唱える人がいなかった。

その後、日教組や自治労と親しく付き合ってみて、幹部の意識と行動がこれに類似している

と思った。協会とことを荒立てたくないけれども、雑誌『社会主義』なんかもう10年も読んでことがないよと協会派とみられている幹部がいていた。

例えば、自治労と日教組のおおきな転換点の一つは、国際組織加盟で世界労連系産別を選ぶのか、中立・非加盟に止まるのか、自由労連系産別を選ぶのかという大論争でした。そのとき、自治労や他の官公労の多くの幹部は、自由労連系の国際公務員連盟（PSI）加盟に切り替えたいけれども、社会主義協会が反対しており、あまりガタガタと組織を揺らさないで何とか実現する方法はないかと模索していた。社会主義協会から完全に心は離れているのだけれども、わざわざ協会と絶縁宣言までして決別することはない、というような気分でした。

国際労働組織での活動

——全通に入られたのは、どういう事情からでしょうか。

初岡 全通に入った理由は、新井則久青年部長と個人的な関係もあったのですが、当時ナショナルセンターである総評、同盟以外に、単産で独自の国際活動をやっているのは全通ぐらいしかなかったからです。

全通は単一組合で組織的な行動力が抜群にあり、当時は政治と国際活動がきわめて活発でした。組合費も高く、しかも本部が全部吸い上げて本部から下に配分するシステムだった。良くも悪くも非常に中央集権的な組織体制をとっていました。これは郵政省との対立関係の中で自衛的にとられた面もあるのですが、ほかの官公労とは違っていた。しかも、組合費を自主徴収しながら、当時の賃金の5パーセントぐらいをとっていた。

ですから、財政的な力量も非常にあって、単独で二つの国際組織に入っていました。総評の

中立路線や当時の社会党のソ連、中国寄りの政策と交流にもかかわらず、総評加盟で、有力な社会党支持団体である全通はブリュッセルに本部を置く国際自由労連（ICFTU）とジュネーブに本部を置く国際郵便電信電話労連（PTTI）に早くから加盟していました。左派からは、アメリカに支配されているという攻撃を受けていた国際労働団体です。実体は違い、ヨーロッパの労働組合が主体でした。国際活動を単産独自で展開していたのは、同盟系のゼンセン同盟と海員組合を除いて、総評系ではたぶん全通ぐらいだったと思います。

全通書記局に私は7年いたのですが、7年目の1970年に宝樹さんの退陣と執行部総辞職という異常事態が発生しました。これは世上で取りざたされた政治がらみの争いや労働戦線統一論批判とはまったく違うレベルの契機によるものです。発端は郵政省との交渉結果が中央委員会で承認されなかったということにありました。

本来は委員長が辞めるほどではない案件で、委員長不信任の動きもなかったけれど、宝樹さんとしては、国際労働運動でも労働戦線統一でも話題をつくり、しかも自分が日本の組合運動をリードしているという自負があったので、この否決に過剰な反応をした。自分の辞任を組合が受け入れるはずはなく、必ずコールバックがあるとみていたのでしょう。これは誤算でした。

当時、宝樹さんは49歳で、脂の乗り切った年代です。われわれ若い者から見るといい年配のおじさんだと思っていましたが、今から思うと49歳ですから無念さが残ったでしょう。自分以外に全通の委員長をやるものはいない、だから全員引き連れて総辞職すれば、必ず追い込んだ連中が「すみませんでした、ぜひやってください」と謝ると考えたのでしょう。江田さん

にしても宝樹さんにしても偉大で、非常に優れた指導者でしたが、優れた指導者は案外普通の人が犯さないような誤りを起すことがあるんですね。

常識的に考えたら、一度辞めた人が復活することは組織内ではまずない。政党はちょっと違いますけれども、官僚の世界でも辞めた人の復活はないでしょう。後継者はいないようでも、組織というものは必ず見つけるんですよ。適任かどうかは別としても。そこを読み違えたのです。

ちょうどそのころ、全電通がPTTI加盟という長年の懸案を討議していました。全通は結成まもなく加盟していたのですが、全電通は遅れてきた青年でした。このPTTI加盟を実現したのは、山岸章さんが大阪から出てきて本部政治国際部長になったからです。私が全通にいるときから、山岸さんは江田派の会合で面識を得ていました。彼は、全電通近畿地本書記長として組合内構革派の論客でした。当時の江田派で目立つ組合の論客というのは山岸さん、国労の山田書記長、それからのちに公明党議員となる草川昭三さんなどがいました。

山岸さんが本部に出てくると、「政治国際部長になったからPTTI加盟を実現する」と宣言し、精力的に討議を進めた。上部団体加盟には大会での3分の2条項が規約にあったのですが、国際組織は拘束力がないので規約に定める上部団体ではない、友誼団体だから過半数で決められるという解釈を中執会議でまず押し通した。そして、2年かけて討議して大会で票決したら、過半数を上回ること僅か十数票のきわどさだった。

当時の全電通はまだ若く、非常に荒々しい組合で大会において何が決まるかの予測が難しかった。そこで、大会前夜に重要な案件の取り扱いを主流派の社会党員協議会で相談するので

す。社会党員協議会で山岸さんが、当時の酒井委員長と自分は加盟提案が通らなければ辞職すると表明した。「山岸さん、それはまずい。PTTIに入ってもいいけれど、山岸さんには辞めてもらいたいという人が多いから」との影の声もあった（笑）。

ついでに言うと、それから何年かたった1975年、今度は国際自由労連への加盟提案を大会に出すことになった。そのとき山岸さんはもう書記長で、のちに委員長になる園木久治さんが政治国際部長。それ以前のやり取りで、反対派はPTTIに入るのには国際自由労連に入る第一歩だと攻撃していた。国際自由労連加盟の前哨戦だという意見への山岸さんの答弁は「国際自由労連加盟などは口が腐っても申しません。4～5年たって山岸さん、「初岡君、そんなことを覚えているのは君ぐらいなものだ」。

国際自由労連加盟を討議した大会では、山岸さんが書記長、及川さんが委員長という体制が確立されていて反対討論もなかった。以前の国際産別加盟討議は大騒動で、2年かかった。私が大会を傍聴した印象では、PTTIに入るのに反対意見のほうが多いぐらいだった。今度、自由労連に入るときには議論がもうなくなっていた。

でも、山岸さんいわく、「おい、初岡君、全電通は民主的な組合だから、一票投票やらなきゃいけないんだ」と。山岸さん一流の自虐的な言い方で「俺みたいな人格者に不信任をくれる奴がいっぱいいるんだから、反対票はみんなイデオロギー的なものだ。隠れ共産党と隠れ協会がみんな国際加盟と俺に反対する。俺の不信任と自由労連反対はほぼ同じぐらいのはずだ」。この岐阜大会を忘れもしないのは、全電通が社青同を弾圧したとして協会派社青同があばれた大会だからです。その大会での代議員投票の結果は、国際自由労連加盟への反対は61票で、

書記長山岸章の不信任票はその倍（笑）。

山岸さんは最初の国際組織への加盟問題でもうちょっとで失脚するところだったのに、決して懲りなかった。僕は山岸さんが本当に偉いなと思ったのは、こういう国際問題は反対が強かった場合、幹部は普通みんな逃げる。検討継続で後任者に問題を先送りして、自分は逃げる。筋を通すのに政治生命をかける決断はあの人らしいなと思って、山岸さんを尊敬しました。

それから、1985年に山岸さんが日本人として初めての国際産別（ITS）会長としてPTTI会長になり、1989年に連合会長に就任したのを機に退任した。それまでの長期にわたって、日本の組合を牽引して国際活動の先頭に立つ山岸さんを支えることができたのは、自分にとってとてもやりがいのある機会でも貴重な経験でした。山岸さんほど「構革派」という強烈な自己認識を持っていた幹部はいなかった。私から見ると、彼ほど政治的立場と行動原理が明解で、ブレが少ない人はなかった。

話が少しもとに戻りますが、公共部門におけるストライキとそれに対する大量かつ厳しい処分がきっかけになって、1970年代に国際労働機関（ILO）への提訴が行われました。これは当時、全通を中心にわれわれが考え出した戦術ですが、日本政府に国際的な圧力をかける目的で総評・公労協・公務員共闘が国際労働団体と共同の提訴をILOにたいしておこなった。

ILO労働側とのかなり綿密な打ち合わせがあって、こういう提訴をすれば絶対に勝てる、我々の立場が認められると精査してのことでした。ILO条約と国際労働基準適用の中で認められる範囲で、ストライキ処分、団交権否認、組合に対する不当介入の3点に絞って全通提訴を行ない、これに続いて総評官公労がいつせいに共同提訴をすることになりました。

組合によっては提訴文を学者や弁護士とかに

書かせるものだから、日本政府の労働政策をすべて批判した長大なものもある。受理したほうも読むのに大変だし、これはまずい。やはり、ILO条約に抵触する事例について、誰が読んでも分かるように解説的分析的に書かなければ。全通の提訴原案も100ページを越すものだったが、こっちはPTTI本部のイギリス人担当者と共同作業で勝手に本文を5ページぐらいに圧縮して、あとは一部資料として添付、単純明快で誰が読んでも分かるように英文で作りました。

早速、郵政省から全通本部に対し、日本文と英文が著しく内容が違っていると捻じ込んで来た(笑)。普通の幹部なら動揺するのだけれども、当時の書記長は大森昭さん。のちに参議院議員を3期務め、今年亡くなった。この人は大変な大物だった。「当たり前だ。日本文はお前さんたちに向けて書いてある。英文はILOに対して出している。違うのが当然だ」と、そういう調子。本人は両方とも読んでいないんだけど(笑)。やはり、指導者というのはそういう点、切りわけがうまいと思った。

相次いで提訴を行うけれど、そのときに世界労連の無力さが日本の組合幹部にもよくわかった。ソ連自体がILO結社の自由委員会と条約勧告適用委員会から結社の自由侵害で厳しい批判を受け続けており、単一労働組合主義と諸条件の法定主義が結社の自由の原則に合致していないので防戦一方なんですね。だから、日本問題なんかを支援していくようなスタンスはとてものとれない。

結社の自由案件では、西欧の労働組合とアメリカの労働組合は常に日本の組合の主張を強く支持していました。われわれも日本政府にプレッシャーをかけるにはアメリカに支持してもらわなければいけないと考えていました。ヨーロッパが全部支持しただけでは日本政府は痛痒を

感じないというので、アメリカの組合だけでなく、アメリカ政府・労働省代表が読んでも、もっともだととられるようにプレゼンテーションを行いました。

それは非常に成功を収めた。だから会議で、アメリカの政労使代表も、やはり日本政府が何とかしなければいけないんじゃないの、というふうになってしまう。これに日本政府がいちばん困ったんです。そういうプロセスの中で、官公労の幹部が毎年大勢ILO活動に参加した。

マスコミからはお祭騒ぎだとかいろいろ批判を受けた。けれども、国際労働運動との関係を考えるうえで、官公労指導者が大きな刺激と責任感を受けとめることにILOをめぐる活動が作用した。直ちには、国際自由労連には入れないけれども、まず関係国際産別に入ろうという動きが具体化した。戦線統一の前には日本の主要官公労が全部ITSに加盟していました。

国際自由労連という点から見れば、同盟が一括加入だったのに、総評系は全通など五つの単産しかなかった。しかも、全通が最大で、あとはみんな小さい。炭労、都市交、全鉱、日放労です。そこで、戦線統一のとき、同盟が自由労連加盟を踏み絵として出してきた。事実上、その条件を空洞化したのが、総評系官公労の自由労連系ITS加盟でした。

当時のILO活動を通じてヨーロッパ労働運動の原則性を再認識しました。ある意味では日本の労働運動よりもしっかりしているのではないかというような印象をヨーロッパ労働組合と国際労働組合運動に対して持った。これが、日本の官公労が国際労働運動にたいする方針を切り替える大きな契機になったと思う。ただ、そのことが歴史的に見てどういう意味を持ったかは、今後もう少し長い目で見なければいけないかもしれません。

そのときに社会主義協会は、自由労連は西側

の組織であるとイデオロギー的に反対した。ですから、私も自治労とか日教組に頼まれて、県単位の学習会や賛否両論の講師による立会演説会にずいぶん行きました。私が加盟推進の立場で行き、社会主義協会からは反対論者がきて、立会討論を何回かやったことがあります。そのときは、組合幹部レベルではもう舵を切ろうと、日教組の場合も自治労の場合も腹を決めていた。

そのプロセスで、少なくとも幹部専従者のレベルでは社会主義協会との組織的な決別が進んでいた。1970年代の半ばから80年代にかけての頃です。しかし、それがイコール構革派の台頭と言えるかどうか。これはまた別の問題です。

当時、私の知っている限り、これは組合の内部的環境にもよりますが、いちばん最初に構革派として手を挙げ、公言してはばからなかったのは、全電通の山岸さんとか、日教組の田中一郎さん率いる現教研ですね。かれらは総評右派といわれていた。それから全日通の田淵勲二さん達。全農林はちょっと色彩が違い、組織問題研（社会党旧和田派につながる）が強かったけれど、ほとんど一緒にやっていました。

そういうことで、組合の中では構革派というよりは、協会対反非協会の対立構図があった。とくに、総評系の組合の中ではそういう形があった。これは論争を通じてというよりは、政策決定と幹部選出を通じて徐々に進行していくという形をとった。もちろん、論争とか議論、研究とか相互交流というものが、かなりの役割を果たしたことは事実だと思います。

また、そういうものがないと、そのプロセスは促進されなかったと思いますけれども、社会党に見られたようなドラマティックな対立抗争とはかなり異なる様相で、総評労働運動総体としての脱協会化が太田・岩井時代以後急速かつ

構造的に進行した。しかし、そのことを指して構革派の勝利とか、大勢が構革派になったとは言えないと思います。

国労・動労と構造改革派

——当時、大きい労組として国労があったと思います。国労がお話の中に出てこないのは、社会主義協会の影響力が強かったので国労はあまり構革とはかかわっていないということでしょうか。

初岡 そうではありません。非常に個人的な理由として挙げられるのは、国労と接触が少なかったからです。私が深く関わっていた全通や全電通と国労というのは、同じ総評・公労協の中でいろいろな面で仲がよくなかった。国労の人を個人的に何人か知っていますが、組織的にはライバル関係というか、対立関係にあったんです。とくに、スト権スト（1975年）以降、その対立は深まったと思います。

また、民営化に対する対処方針ですね。これで国労と他の組合とは大きく違う。また国労の場合でちょっと日教組と似ているのは、中で「学校」といいますか、派閥がはっきり分かれていた。国労の中にも、非協会の派閥もありました。国労は民同、革同と二つあって、その民同の中に協会系と非協会系とがあったんです。よそよりもっと複雑だった。国労というのは独特な組合で、今日は左だけれども明日は右に行くという、あつという間の転換、一夜のうちの転換というドラマをよく演じた。

——国労より動労のほうが大きく変わりますよね。

初岡 動労は構造的変化が大きかった。

——動労はどうなんですか。

初岡 動労は出発点から60年代中ごろまでは全通や電通と共同歩調をとった民同系組合でしたが、その後徐々に変わっていきました。公

労協の中では一緒にやっていたと思いますが、松崎さんが完全な実権を握る前後から、政治的な問題で全通、電通と行動を共にするのは控えていた。国労、動労というのは喧嘩しながらも同じ使用者に対してかなり共同でやっていたと思います。公労協事務局長に高橋富治さんという動労出身の人がいて、長い間実によくまとめ役をやっていました。ILO闘争では牽引役でした。公労協の組織体、運動体としての機能は、彼が辞めて以降はかなり求心力を失っていった。

—ITSに入っていなくてもILOへの提訴とか活動はできるわけですね。ただそれだけでは不十分だということで、国際産業別書記局であるITSに入っていく。それはかなり違いがあるということなのでしょうか。全通との関係でいえばPTTIに入ることにどの程度のメリットがあるのか。そのへんはどうなのでしょう。

初岡 メリットというものは客観的に存在しても、それをうまく活用しなければメリットとして生きません。全通の場合はフルに使ったと思います。まず、国際組織との共同提訴という形をとりました。ILO提訴でも国際自由労連とPTTIによる全通への支持が未加盟の総評系官公労全体を繋ぐカギでした。

結社の自由委員会と理事会の労働側代表は国際自由労連がだいたい選び、継続して全部をまとめています。そこを通じて、ほかの案件と全通提訴を切り離し、先行してモデルケースとして審議させ、原則と判例をまず確立させる戦術をとることができました。

—かなり違いが出てくるということですか。

初岡 ええ。当時PTTIの書記長は国際自由労連書記次長をかつてやっていた人で、ITSグループ議長として長年にわたり自由労連執行委員会メンバーにも入って力を持っていました。

PTTI事務所もジュネーブにありまして、ILOと日常的な接触を持っていましたから、そういう点をフルに活用してほかの組合にもサービスを惜しむことなく提供しました。そのことから、国際組織に加盟することを通じての国際連帯が具体的に理解された。

もう一つは、メリットの面からだけではなく、日本の組合がこれだけ大きな存在になっており、また労働運動は組織的な運動なのだから、国際組織に入らないという根拠がなくなった。国内で連合体上部組織に加盟しているのに、なぜ国際組織に加盟しないのか。国内的にも国際的にも組織を通じての運動という原理は同じという、そういう理屈にみんなおおむね納得していたと思います。今もそうだけれど、国際的な責任論が日本で特にやかましく唱えられていた時ですから、追い風もありました。

—メリットがあるというだけではなくて、国際的な労働運動全体にそれなりのものを及ぼしていくというか、そういう役割や責任があるのではないかという話ですね。

初岡 私が全通に入ったときは、宝樹さんがすでに国際的な役割を重視していました。ところが、国際加盟費を半額しか払っていないんですよ。そこで私は宝樹さんに、「加盟費は大した額じゃないから全額払ったらどうでしょうか」と言ったら、「初岡君、何を言うんだ。日本の労働者の賃金とヨーロッパの労働者の賃金を比較してみろ。日本は半分ぐらいのものだ。半分も加盟費を払っていれば立派なものだ」と受け付けない。

当時の全通本部財政局長の針ヶ谷栄次郎さんという人はクリスチャンで、目黒区教育委員も長くやった、非常に真面目な人でした。針ヶ谷さんに進言すると「それでは直しましょう」と、宝樹さんが知らないうちに勝手に増額修正しちゃった。国際費なんて全体から見れば小さなも

ので、予算の中に何か問題があって誰かがほじくり出さない限り目に付くような項目ではなく、大会での論議はありませんでした。

パーキンソンに財政法則というのがありますが、よく当たっています。一般の代議員の関心というのは自分が理解できるアイテムについて集中し、それについては議論が発展する。ところが、闘争費だとか自分の理解を超える大きな金額のものについては、趣旨が良ければほとんど関心なし。闘争費100億円積み立て、ストライキ資金100億円積み立てを提案しても質問者はいない。異議なしですよ。ところが、荻窪役員寮の畳の張り替えなんて1時間ぐらいもめちゃう。「なんで2年に1回か。個人の家では3年に1回の張替えだってやらない」(笑)。

——日韓条約に反対するいわゆる反戦青年委員会が結成されてくる中で、初岡先生はその結成の前後で何かかわられたのでしょうか。

初岡 反戦青年委員会をつくる契機は私もよ

く知らないし、私はもう当時の青年運動とはまったく離れていました。ただ、全通青年部から相談を受けたときには、反戦青年運動のあのスタイルはちょっと全通の中では通らないと思う、だからこれは慎重にしたほうがいい、とやや否定的なアドバイスをした記憶がある。

全電通は全通と違って、自主的青年部ではない。いわゆる青年対策部長が任命されるのであって、活動家集団はあるけれどもそれを組織の中に反映するチャンネルはない。だから、むしろ全電通の中における社青同の人たちがかなり参加していた。全通からはほとんど参加していない。

全通は組織の中に議論と運動をおこなえるチャンネルを持っていたから、個人としてああいふ形で行くことをしなかったと思う。ただ、僕は積極的に反対も賛成もしなかった。というのは、反戦青年委員会をやっていた人の中には昔の仲間もかなり大勢いましたからね。